

有田潤先生のこと

山下 仁

有田潤先生が冠詞研究会に参加してくださったのは、私の手元にある資料によると1994年の5月ごろからだったようである。初期の頃、まだ30歳そこそこであった私に「まだ若いからなんでもできるじゃあないですか」とおっしゃっていたのが忘れられない。光陰矢の如しで、そんな私ももう50を過ぎてしまった。それはともかく、その後2002年ごろまでは、ほぼ毎回のよう、平塚から大阪大学言語文化部（当時）の4階にあるドイツ語資料室に来てくださった。停電のときなどは、細谷さんのご自宅へ行って研究会をしたこともあった。

有田先生はドイツ語ばかりでなく、ラテン語の参考書でも知られ、フランス語やイタリア語にも堪能でいらっしゃったが、非常に気さくで、日本酒を飲むとさらに饒舌になった。「文部省（当時）の役人などは、いばりくさっているけど、天下り先がほかと比べるとないんだ、ざまあみやがれた」などと江戸弁で話したかと思うと、おかしな大阪弁で「どないでつか、そう思いまへんか」などと言ってニコニコ笑っていた。研究会のあとの懇親会では常にマイペースで、いつも日本酒を2合ほど飲んでいた。

研究には熱心で、冠詞研究会での雑談がすぎると、「もう研究を始めましょうよ」とおっしゃり、関口に関しては、主に細谷さんと議論していた。『ドイツ語学講座』や『入門 ドイツ語冠詞の用法』などの著作のある先生の議論は、非常に理路整然としており、常に刺激的であった。そして、関口を敬愛してやまず、「本当にすごいねえ」と評価していた。

そんな先生が、私が書いたものを添削してくださったことがある。きわめて緻密にコメントをつけてくださり、句読点のつけ方まで丁寧に見てくださっていた。ここにそれを記すことはできないのは残念だが、今後、そのような学恩に報いたいと願っている。

謹んで、ご冥福を祈ります。